

# Faith (信仰・信) に関する近年の 哲学的議論の調査

蝶 名 林 亮

## 1. はじめに

「Faith (信仰・信) とは何か」という問いは特に宗教において重要なものであろう。どのような宗教教団であっても、「あなたたちはどのような信仰を持っているのですが?」と聞かれた場合、ある程度まとまった答えができるはずだろう。推奨される信仰が提示できない団体は、宗教教団とは見なせない。

信仰は宗教において中心的な役割を果たすものであるため、信仰に関する哲学的探究は主に宗教哲学においてなされてきた。西洋哲学の歴史を見ると、アウグスティヌス、アンセルムス、トマス・アクィナスなどの神学者らの信仰に関する考えや、パスカル、ロック、バークリー、キルケゴール、ウイトゲンシュタインなどの哲学者らの信仰に関する考えが、宗教哲学の歴史の中で議論の対象になってきた。

信仰を巡る問いは宗教哲学において伝統的に探究されてきたわけだが、興味深いことに、現在の(英語圏の)宗教哲学において信仰は再び活発な議論の対象となっている。その主な要因は、信仰とも密接な関係を持つと考えられる信念 (belief) や受容 (acceptance) などの心的現象に関する精緻な分析が、認識論、心の哲学、科学哲学などの諸分野において行われるようになり、信仰に関する丁寧な分析も可能になったからであると思われる。

また、倫理学や認識論など、宗教哲学以外でも“faith”（信仰・信）そのものが議論の対象になることが多くなってきた。R. M. Adamsは倫理的に理想的な人生を生きるためには倫理や道德そのものやそれらが提示する道德原理などに対する一種の信（faith）が必要であると主張する（Adams 1999）。またJ. Ichikawaは認識上の正当化などを考察するためにはわれわれの認知能力に対する一種の信頼についての考察が必要であると主張する（Ichikawa 2018）。

このように、現在、信仰・信に関する問いは宗教哲学内部においてのみならず、倫理学や認識論などの哲学諸分野において広く検討されるようになってきた。

上記のような研究動向を受けて、本稿では多様化する信仰・信に関する研究の現状を概観し、現在の論争状況を整理する。

## 2. “faith” をどのように訳すか

本稿が研究の対象とするのは英語の“faith”によってあらわされる現象である。この言葉は通常「信仰」と訳され、宗教に特有なものとして理解される。ところが、現在の“faith”研究を見ると、研究の対象となっているものは宗教的な文脈において語られるものだけではなく、非宗教的な文脈で語られるものも含んでいる。以下でそれらの中からいくつかの例を見てみる。

【宗教】：一神教を信奉する宗教教団に属する人が、「私は神の存在を信じている」と発言する。

【励まし】：苦しい状況におかれた友人に対して、「君の人生は無意味なんかではない。私はそう信じている」と言い、励ます（Adams 1999: 376）。

【スポーツ】：サッカーの試合で5点差をつけられてひいきにしているチーム

が負けている。もう既に後半に入っている。多くの人がもう勝負はついたと思って席を立ち始めている。しかし熱狂的なファンは、「私は君たちの勝利を信じている！」と言って応援を続ける (Howard-Snyder 2013: 357)。

【浮気?】：オセロは妻のデズデモーナに贈ったハンカチを浮気が疑われるキャシオーの部屋で見つけてしまった。だがオセロはデズデモーナが浮気などしていないと信じることにして、それ以上の詮索をやめることにした（もちろん、本当の『オセロ』ではこのような喜劇ではなく悲劇的な最期を迎えるわけだが）(cf. Buchak 2012: 233, Ichikawa 2018: 2)。

【採用】：人事部長のサチコは最後の候補で残ったハナコを雇うか否か考えている。面接での印象はハナコは感じの良い人物であり、履歴書からも彼女がこの仕事に必要な能力を具えていることがうかがわれる。しかし、この仕事はかなり重大なものであり、もし彼女が適任でなかったならば、会社に大きな損失をもたらすことになる。そのリスクを考えると、サチコは最後までハナコを雇うのが正しい選択か、不安を感じ、決めかねている。しかし、最後はこれまでの審査の過程、自分の人物眼、そしてハナコ自身を信じ、採用を決定した (Ichikawa 2018: 3)。

上で示した【宗教】の事例は伝統的に宗教哲学で議論されてきた宗教的な“faith”の事例ということになるが、他の事例も非宗教的な“faith”の事例とされる。【励まし】においてある人が友人の可能性を信じること、【スポーツ】においてファンがひいきにしているチームの勝利を信じること、【浮気?】において夫が妻を信じること、【採用】において採用担当者が採用方法の信頼性や採用を検討している人物のことを信じること、これらは何かを信じているという点では共通している。近年のfaithに関する研究においては、これら非宗教的な場面において見受けられる何かを信じるという現象も、faithの一形態とされ、議論の対象となっている。

さて、このような広い意味を持つ “faith” だが、この言葉を「信仰」と訳すことは適切だろうか。もし “faith” を「信仰」と訳することになると、上記の非宗教的な事例も「信仰」の事例ということになるが、このような理解は日本語的には違和感があるだろう。日本語話者ならば、神を信じることは信仰の一例であるように思えるが、友人の可能性を信じることは信仰の一事例とは見なせないのではないか。

一方で、本稿が研究の対象としている英語の “faith” は必ずしも宗教的な文脈のみで使用される言葉ではないことがしばしば指摘される。上記の事例に対応する英語表現を見てみよう。

#### 【励まし】事例について

If your friends are going through hard times, they may or may not be tempted to despair. Either way it is likely to be important to them to have your support as a person who believes in them and in the value of their lives. Harsh circumstances may try your faith that their life is worth living, **which makes it seem natural to speak of “faith” in this context. Having that faith might be essential to being a good friend, and not having it might be letting the other person down in a particularly hurtful way** (Adams 1999: 376).

#### 【浮気?】事例について

One might manifest **faith in one’s spouse by ignoring evidence of infidelity** (Ichikawa 2018: 2).

#### 【スポーツ】事例について

‘I am serious. **I have faith that they’ll win**’, ‘What? You believe they’re going to win?’ , ‘No, I don’t believe they’ll win; I said I have faith that they will’ (Howard-Snyder 2013: 357).

【採用】事例について

you overcome your own very natural doubts, it is easy and proper to describe this as an **exercise of faith**. You put faith in your process, in your ability, to make rational decisions, and in Ranjit himself (Ichikawa 2018: 3).

\*太字による強調は筆者によるもの。

このように、“faith”という言葉は宗教的な場面に限定されない広い文脈で使用される言葉である。本稿が議論の対象としたい現象はこのように様々な文脈で語られる“faith”であるため、英語の“faith”を「信仰」と訳すことは適切ではないかもしれない。むしろ、宗教的文脈以外でも使用できる「信」や「信じる」という言葉を“faith”の訳語とする方が不必要な誤解を生まないかもしれない。

このような背景を受けて、少し違和感があるかもしれないが、本稿では“faith”に対応する日本語として「信」「信じる」などの表現を使用する。また、後述するが、“belief”や“believing”について扱う場合は、「信」や「信じる」とは概念的に異なるものとして「信念」「信念を持つ」などの表現を使用する。一方で、「信仰」という言葉は宗教的な場面で語られる“faith”の一種を指す言葉として使用する。

### 3. 命題的信

近年の信（faith）に関する研究において中心的に論じられているものは、いわゆる命題的信（proposition faith）である。信を命題的なものとして理解するというこの考えは、信を命題的態度（propositional attitude）の一種であると理解するということである。

ここで言うところの命題とは、たとえば、「創価大学は八王子にある」などの主部と述部からなる文によって指されるものである。そして、命題的態度とは、われわれがこのような命題に対して持ち得る様々な態度の総称である。

たとえば、私が「創価大学が八王子にあって欲しい」と願っていたとしよう。このような私の心の状態は、「創価大学は八王子にある」という命題に対して、それが真であって欲しいと思っている心の状態として理解される。また、私が創価大学は八王子にあると考えているという心の状態は、「創価大学は八王子にある」という命題に対して、それが真であると見なしている心の状態（即ち、信念 belief）として理解される（信念については後述する）。

前節で挙げた信の例は、それらが命題的態度であると想定すると、以下のように理解されることになる。

**【宗教】** 神の存在を信じる⇒「神が存在する」という命題に対して、何らかの態度を持つこと。

**【励まし】** 君の人生は無意味ではないと信じる⇒「君の人生は無意味ではない」という命題に対して、何らかの態度を持つこと。

命題的態度は主部と述部という構成を持つ命題に対する態度の総称であるわけだが、そうであるとする、この態度を英語で表記する場合、その態度の内容は that 節で表されることになる。そのように考えると、以下のような表現は命題的態度としては不完全なものになる。

I desire that Soka University（私は創価大学を欲する）

上の表現が不完全な形でしか当該人物の命題的態度を表していないと考えられるのは、that 以下の命題の内容に関する箇所が文法的に不完全であるか

らである。that 以下は主部と述部のどちらも持つ表現がこななければならないが、単に“Soka University”という単語が that の後にあるだけでは文法的にも完全な文にはならない。一方で、たとえば、「私は創価大学の学生になることを欲する」などであれば、英語では“I desire that I become a student of Soka University”と表すことができ、that 節をとる文法的に問題のない文によって表すことができる。

さて、何かを信じることを一種の命題的態度であると理解するとの提案には、違和感を覚える人も多いかもしれない。それというのも、英語表現において“faith”が使用される文脈は、以下で示すように必ずしも that 節をとる場合だけではないからである。

①何かへの信 (faith in): 「私はあなたを信じているよ」という表現は、英語では that 節ではなく、“I have faith in you”などで表現できる。

このようなある人やものへの信は、対人的信 (interpersonal faith) とも呼ばれる (2014 Buchak: 52)。伝統的に議論されてきた神への信 (宗教的信・信仰) も “faith in God” と表されることが自然である。重要な点は、このような仕方では表される信は that 節をとらずに表されるものであり、命題的態度として理解することができるか、疑問が残ることである。

このような “faith in” の形式以外にも、faith が以下のような仕方で使用される場合もある。

②信によって何かを受け入れる (on faith): 「あなたを信じてこの本を貸すよ」という表現は、“I allow you to borrow my books on faith”などで表現できる。同様の形式をとる宗教的信仰に関する表現として、“Mark takes it on faith devotion to Amitabha will result in enlightenment” (Howard-Snyder 2013: 358) なども挙げられる。

これらの形式を持つ信は命題的信とどのような関係になるのだろうか。二つの可能性が考えられる

(1) それぞれの異なる形式で表される心の状態は独立しているもの。命題的信にはそれだけが持つ独自の特徴があり、他の種類の信 (faith in, on faith など) にはそれぞれの異なる特徴がある。

(2) これらの心の状態はどれか一つの心の状態に還元できる。たとえば、对人的信は命題的信の形式で表すことができるものであり、両者の言語的差異は実際の心的内容の差異を表すものではない。

二番目の可能性について、少し立ち入って考えてみる。たしかに、たとえば以下のような仕方では、faith in の形式で表される心の状態は、実は faith that の形式で表される心の状態として理解することができるかもしれない。

**【faith that による faith in の書き換え】**

私はあなたを信じているよ (“I have faith in you”)

⇒私はあなたの夢がかなうことを信じているよ (“I have faith that your dreams will come true”)

これら異なる信の関係に関する考察は、「私はこの部屋に三人以上の人がいることを知っている」などの命題的知識 (knowledge that) と、「私は自転車の乗り方を知っている」などの遂行的知識 (knowledge how) の関係に関する考察と類似的に理解することができるだろう。これらの知識について、たとえば G. Ryle は両者は異なる種類の知識であると主張したが (1949)、近年では J. Stanley と T. Williamson (2001) などは後者を前者に還元するという方針を打ち出している (池吉・中山 2009 を参照)。命題的信と他の信の関係も、このような知識に関する論争と類似的に理解することができる。即ち、



faith in や on faith など表現される心の状態は、faith that の形式で言い換えることができるものなのか、それともそうではなく、前者はfaith that の形では表現しきることができないものなのか、上記のように、faith in の形式をとるものを過不足なくfaith that の形式で書き換えることができるのであれば、前者は後者に還元できるということになるが、それができないということになると、両者の形式によって表される心の状態はそれぞれ独自のものであるということになる。

本稿ではこの問題にはこれ以上深く立ち入らず、命題的信に焦点を絞って議論を進めていく。

特に宗教的な場面で語られる信を命題的態度として理解することには、また別の違和感があるかもしれない。もし信が命題的態度を持つものであった場合、信の対象は基本的には主部と述部の関係を持つものということになる。しかし、宗教的信（信仰）の内容はそもそも言葉で表すことができるようなものではないとされる（cf. Adams 1999: 374）。そうであるとすると、信の対象は主部と述部からなる文の形式を持つ命題だとする考えに対して、疑義が呈されることになるかもしれない。

たしかに、宗教的信の内容は言葉で説明し尽すことができるものではないかもしれない。しかしながら、そうであるからといって宗教的信を命題的態度として理解するという考えが即座に疑義にさらされるわけでもないことに注意したい。宗教的信といっても、何かに関する心の状態であるということについては同意がとれるものと思われる。即ち、キリスト教徒であったら神やイエスに関する何らかの信を持つわけであるし、仏教徒であれば仏や仏が説いた法（ダルマ）に関する何らかの信を持つだろう。もし信が何かに関する心の状態であることが認められるならば、たとえその何かが言葉で表すことができないものであったとしても、信という心の状態自体が命題的態度であることについては認めることができるだろう。

即ち、以下のような命題の形式をとるものとして、宗教的信の内容も理解できるということである。

- ・神が持つ特徴は言葉で表すことができないものである
- ・仏が問いた教えは信じるのが難しいものであり言葉で表すこともできないものである

上の例では、神や仏が説いた法それ自体は言葉で説明し尽くできないものであるとされるが、そのことを述べている上記の表現そのものは命題の形式をとっている。即ち、宗教的信の内容が言語化できないものであったとしても、その態度自体を命題的態度として理解することは可能だと思われるということである。

#### 4. 信 (faith) が持つ特徴

信 (faith) がどのような特徴を持つものか、諸説ある。それらについて以下で紹介していくが、まずは多くの論者が信が持つ特徴としてあらかた同意していることを確認していく。

①**肯定的な評価 (positive evaluation)** : 何かを信じている場合、われわれはその信の対象に対して、何らかの肯定的な評価を下すと思われる (Buckareff 2005, Buchak 2014, Howard-Snyder 2013)。もし私が神の存在に対して信仰を持つ場合、私は神が存在することについて肯定的な評価をするだろう。即ち、神が存在することは良いことであるという価値判断を下すだろう。同じように、もし私が友人の人としての価値を信じているのであれば、友人が価値を持つということ自体が良いことであるという判断を下すだろう。逆に、神の存在に対して信仰を持っているにも関わらず、神が存在することに対して肯定的な評価を下さないということは考えにくい。肯定的な評価を下さないのであれば、おそらく神への信仰はないということになるだろう。

②肯定的な欲求（positive conative stance/ desire）：上記の点と密接に関わることだが、もし私が神の存在を信じている場合、私は神が存在することを欲することにもなるだろう（Howard-Snyder 2013）。私が神を信じているにも関わらず、神が存在することを欲していないとは考えにくい。同様に、もし私が友人のすばらしさを信じているにも関わらず、友人がすばらしさを持つことを欲していないということは考えにくい。もし私が友人がすばらしさを持つことを欲していないのであれば、「君はすばらしい人だよ」と言ったとしても、私は友人にすばらしさがあると考えている「ふり」をしているだけであるように思える。

ここまで、何かを信じる場合、われわれは信じている対象に対して肯定的な評価や欲求を持つという点を確認した。このような考えに対して、伝統的に一神教で見られる神への信仰は神への畏敬・恐怖に基づくものであり、たとえ神に対して信仰を持つとしても神の存在に対して肯定的な態度を持たない場合もあるのではないかという疑義が挙げられるかもしれない。たしかに、宗教的な文脈においては信仰が肯定的な欲求とは逆の一種の恐怖によって保持されるということもあるだろう。しかしながら、このことはここで提示されている二つの考えの反論にはならないだろう。次のような問答を想定してみよう。

タロウ：「あなたはなぜ神を信じているのですか？」

ジロウ：「それは、神が非常に恐ろしい存在であるからだ」

この後に、タロウが「では、あなたは神が存在することは良いことであると考えますか？ また、あなたは神が存在することを願っていますか？」と聞いたとしよう。この質問に対して、ジロウが「神が存在することは良いことなんかではない。本当は神など存在しない方がよいのだ。そして、私は神になど存在して欲しくない」と答えたとする。この場合、ジロウはそもそも

神への信仰など持たないことになるだろう。ジロウのように答える人は、宗教的な文脈で語られる「不信心な者 (infidel)」の典型であろう。

一方で、タロウの問いに対してジロウは次のように答えることも考えられる。

ジロウ：「私は神が恐ろしい。しかし、神が存在しない世界が良い世界であるとはもちろん思えない。神がない世界など、私には生きる価値がないように思える。だから、私はもちろん神には存在していて欲しい、その存在は恐ろしいものではあるが」

ジロウが神を恐れているにも関わらず神には存在していて欲しいと願う心持ちを持つことは、少し逆説的に見えるかもしれない。ただ、このような心理を持つことはそれほど不自然なことではないだろう。怖いとわかっているジェットコースターに乗ること、厳しい意見を言われるが適切な助言をもらえるという点については信頼ができる先輩に指導を仰ぐこと。これらは恐怖と肯定的な欲求が同居する例であろう。ジェットコースターに好んで乗る人は、それへの恐怖もあるものの、それでもジェットコースターに乗ることを欲していると思われるし、もしそれが解体されてしまうと聞いたら落胆するだろう。また、怖い先輩に話を聞きに行こうとする人物は、やはり先輩へは恐怖を感じるが、それでも先輩に話を聞くことを欲してもいるだろう。もし先輩に連絡をしたにも関わらず、用事があって話すことができないと言われた場合、少しほっとするかもしれないが、それでも落胆もするだろう。このように考えれば、何かを信じる場合に畏怖や恐怖といったものが介在している場合であっても、信じる対象に対する肯定的な評価や欲求を持たないということはないことがわかる。

また、信の対象に対して肯定的な評価や欲求を持つという点は、われわれが何に対して信を持つのか明らかにする場合に良き導き手にもなる。次のような問答を考えてみよう。

タロウ：「僕は神が存在すると信じているんだ」

ジロウ：「それでは、君は神の存在は良いことだと思っているし、神が存在することを欲しているわけだね」

タロウ：「うーん、厳密に言うと、僕は神が存在することは良いことだと思っているし、それを欲しているわけではあるが、それ自体を評価し、欲しているわけではないんだ。神が存在した場合、正義の行いをするものは救われ、悪の行いをするものは最終的には罰せられるはずだ。このような公平な世界観が真であることを、僕は評価し、欲しているんだ」

この問答において明らかになることは、タロウが神の存在そのものを評価・欲しているわけではなく、神の存在によって保証される公平な世界観が成立していることを評価し欲していることである。このことから、タロウが信を持つのは神の存在というよりも公平な世界観であるということがわかる。

### ③実践的なコミットメント（practical commitment）

何かを信じている場合、何らかの実践的なコミットメントが課されることもしばしば指摘される。神を信じているのであれば、神の導きに従って生きることを実践的な理想とすることになるかもしれない（Kvanvig 2013）。同様に、友人の価値を信じているのであれば、そのような信に基づいて友人を励まそうとするだろう。また、何かを信じているのであれば、信じている対象が成立しているという前提のもとで生きる・行為するだけでなく、これ以上の証拠を探すこともないし、信じていることを否定する証拠を探すこともないというコミットメントを自分に課することになるかもしれない（Buchak 2012）。浮気が疑われる配偶者をそれでも信じるのであれば、それ以上の詮索はしないだろう。配偶者を信じようとはしているが、それでも配偶者の行動をチェックするなどの行動をする場合、実際には配偶者を信じてはいない

ことになるだろう。宗教的な文脈においても、神への信仰を持つと思われる人が神の非存在に関する証拠を探していた場合、われわれはその人が本当に神への信仰を持つ人物であるのかどうか、疑いたくなるだろう。

ただ、何かを信じていたとしてもそれに関する証拠をさらに探すことはあり得るだろう。次のような例を考えてみよう。

### 【熱心な牧師】

ここに熱心なプロテスタントの牧師がいる。彼女は長年、神に対する信仰を保ってきた。一方で、彼女は非常に勉強熱心でもあり、牧師として必要な神学上の知識だけではなく、神の存在証明に関する議論など、哲学の歴史の中で神がどのように議論されてきたのか、常に研究している。

勉強熱心な牧師は神の存在証明について研究している。これは一見したところ、神に関するさらなる証拠探しのようにも見える。では、彼女は実は神に関する信仰を持たないのだろうか。

ここで注意すべきことは彼女の動機であろう。もし彼女が実は神に対して信仰を持つか持たないかまだ迷っており、その迷いを晴らすためにさらなる証拠探しをしているのであれば、彼女はまだ信仰を持たないことになるだろう。一方で、もし彼女の証拠探しが何らかの別の理由であった場合、彼女の証拠探しと彼女の信仰の間にはそれほど強い関係はなくなる。たとえば、彼女の証拠探しが牧師として信者や改宗を考えている人たちへの説明義務を果たすためだった場合、彼女が既に信仰を持っていたとしても彼女が神に関するさらなる証拠探しをしていることは説明できるだろう。

### ④美德（徳）になり得るもの

何かを信じることについて、そのこと自体が肯定的な評価の対象になり得ることもしばしば指摘される。これは、信じることが一種の美德（徳）にな

り得るとの考えがある程度共有されているということである。

伝統的に、宗教的文脈においては信仰を持つことは一種の徳であるとされてきた（Adams 1987, 1999）。ある宗教的観点から考えると、その宗教やその宗教が提示するもの、世界観への信仰を持つことは、肯定的な評価を受けるものであるということである。

宗教的文脈以外においても、何かに対して信を持つことは肯定的な評価の対象になり得る（Buchak 2014: 52）。たとえば【励まし】の事例などで見られる信は、良き人間関係を成立させるために必要な徳と考えられる。

ここまで、信が持つと考えられる四つの特徴についてみてきた。宗教的な信仰であっても、宗教的文脈以外で語られる信であっても、これらの特徴を持つと考えられる。このことは、これら四つの特徴を共有する状態であるという意味で、宗教的な文脈で語られる信仰と、宗教的文脈以外で語られる何かを信じるということは、実は同種のもとと見なすことができる一つの理由であるのかもしれない。

## 5. 信仰に関する論争

前節では信について論者の間である程度意見が一致していると思われる点について見たが、論者の間で意見が一致していない問いもある。その中でも特に中心的な問題は、信が信念的なものであるか否かという問いである。以下、特にこの問題に注意を払う形で、信に関するいくつかの論争を見ていく。

### 5-1：信仰は信念的なものであるか

宗教的な信仰やそれ以外の信が信念的（doxastic）なものであるか否かという問いは、信を巡る論争の中でも最も活発に行われているものである。そのような事情もあるため、以下、少し立ち入って考察していく。

信が信念的なものであるとはどういうことか。これは、何かを信じるということとは、それに対する信念を持つことを含むということである。

この点を説明するためにはこれまで議論してきた信 (faith) と信念 (belief) の区別について明確にする必要がある。ここでは主に信念について説明することで、この点を明確にする。

信念に関する基本的な特徴を挙げるとすると、①それが命題的態度であること、②対象となっている命題を真であると見なす態度であることの二点を挙げることができる。私が創価大学は八王子にあるとの信念を持つことは、私が「創価大学は八王子にある」という命題を真であると見なしているということである。

では、ここで言うところの「ある命題を真であると見なす態度」とはどのようなものか。この点を説明する一つの典型的な仕方は、信念を一種の傾向的状态 (dispositional state) として見なすという考えである (Audi 1972, Schwitzgebel 2013)。

ある状態を傾向的状态として理解するとは、その状態にあるもの (entity) が一定の環境下で法則的な動き、反応をすることを説明することで、その状態を理解しようとする考えである。傾向的状态の例として、たとえば「割れやすさ」などの性質が挙げられる。コップが割れやすいという性質を持つことは、そのコップがある一定の環境下におかれた場合に、たとえば強い物理的刺激を受けた場合などに、割れるということである。

信念もこのような仕方では、ある信念を持つ人が同時に持つ傾向性を説明することで、理解できるかもしれない。この点について、Alston (1996) は以下のような提案をしている。

1. S が P であるとの信念を持つ場合、もし誰かが S に P であるかどうか訊ねた場合、肯定的に答える。
2. S が P であるとの信念を持つ場合、もし S が P であるかどうか考察した場合、S は P であると感じる。



3. SがPであるとの信念を持つ場合、もしSがPであるならばQである  
と考える場合、SはQであるとの信念も持つ。
4. SがPであるとの信念を持つ場合、もしSが実践的・理論的推論を行う  
場合、適切な場合にSはPを推論の中で一つの前提として使う。
5. SがPであるとの信念を持つ場合、もしSがPではないことを学んだ場  
合、Sはそのことについて驚く。

信念が持つ上記の傾向性はある程度適切なものであると考えられる。私が「創価大学は八王子にある」との信念を持っている場合を考えてみよう。そうであった場合、もし私が誰かに創価大学は八王子にあるのかと訊ねられたら、そうだと答えるだろう。もし私が「創価大学はどこにあるか」と問うた場合、創価大学は八王子にあると考えるだろう。大学が八王子にあるということは、その大学が東京にあることを意味するが、そうであるならば、もし私が創価大学は八王子にあるとの信念を持ち、かつ、八王子にあることと東京にあることの関係について考えているのであれば、私は創価大学が東京にあるとの信念も持つだろう。もし私が創価大学への通学可能な距離はいかほどかという問いを考えている場合、私は当然、創価大学は八王子にあると想定し、その想定に基づいて首都圏の主要な町までの距離と移動時間を算定するだろう。そして、もし私が八王子を訪れて創価大学を発見できなかった場合、私は驚くだろう。

さて、信 (faith) が信念 (belief) を含むか否かという問いに戻ろう。もしあることへの信がそれへの信念を含むのであれば、たとえば神が存在していると信じる (faith that God exists) 場合、「神が存在している」という命題を真であると思なしている (belief that God exists) ことになる。このような考えをひとまず「信念説」と呼んでおこう。

信念説はある意味で常識的な見解であるように思える。もし私が神の存在を信じているのであれば、当然、私は神が存在するとの命題を真であると思なしているだろう。信念説は宗教的信仰に関する探究の中で支配的な考えで

あった様子であり、信仰とは信念に加えて前節で述べたような特徴を持つものであると考えることが通説であった (MacDonald 1993, Evans 1998, Plantinga 2000, Malcolm & Scott 2017).

しかしながら、近年、信仰は信念的なものではないとする論者がかなり増えてきた (Alston 1996, Audi 2008, Schellenberg 2014, Swinburn 2005, Buchak 2012, McKaughan 2013, Pojman 1986 など). これらの論者の考えを「非信念説」と呼ぼう.

一見すると非信念説は受け入れがたい考えである. 【励まし】 事例を考えてみよう. もし私が困難に直面する友人に対して「君の人生は無意味なんかではない」と言っているにも関わらず、「君の人生は無意味ではない」という命題を真であると思えたいとする. その場合、私は本当は友人の人生の価値など信じていないように思えてくる. このように考えると、何かに対して信を持つためには、それに対して信念を持つことが必要条件であるように思えてくる.

では、近年の論者はなぜ信念説に対抗して非信念説を提案しているのか. 以下、非信念説のための代表的な三つの論証を、Malcolm & Scott (2017) の整理を参考にしつつ、紹介する.

### [1] 疑い (doubt) からの論証

一つ目の論証は、信は一種の疑い (doubt) と両立するが信念は両立しないとの考えに訴えるものである. この考えは以下のような論証として提示することができる.

**【前提1】** 信仰は疑いと両立する.

**【前提2】** 信念は疑いと両立しない.

**【結論】** 信念は信を持つために必要なものではない.

まずははじめに【前提2】について説明する。疑いと一口にいってもいくつもの異なるタイプが挙げられる。たとえば、われわれは自分が保持している信念の内容を疑わせる事柄について認識した場合、その信念に対して多少の疑いを持つ。ただ、それでもその信念を保持できる場合もあるだろう。地球の温暖化について、地球には温暖化などおこっていないという議論があるが、このような議論を認識したとしても、われわれはそれでも地球は温暖化しているとの信念を持つことができるだろう。

このように、疑いの中には信念と両立するものもあるように思えるが、次のような疑いの状態にある場合は、われわれは該当する信念を持つことができないだろう。

#### 【信念と両立しない疑い】

ある命題について、現在その人が持っている証拠では決定的なことが言えない（その命題を支持するものも支持しないものも両方の証拠がほぼ同じ程度にある）ために、その命題を信じてはいないし、その命題を決定的に否定する証拠があるわけでもないため、完全に信じない（disbelieve）わけでもない（Malcolm & Scott 2017: 359）。

再び温暖化問題に関する信念を例にとって考えてみよう。私が温暖化問題について本格的に研究をしている場合を想定してみよう。私は現在の論争が錯綜していることを認識し、温暖化を肯定する論者の側からも、それを否定する論者の側からも、決定的な証拠が提示されていないと感じている。このことから、私は地球の温暖化が進んでいると信じてはいないが、かといって、それは全くの誤りだとも考えていない。このような状態にあった場合、それでも私が地球の温暖化は進んでいるとの信念を持つことは困難であろう。

このようなタイプの疑いと信念が両立しないとの主張が【前提2】の内実である。次に、【前提1】を見てみる。ここまでの説明に従うと、【前提1】の内実はこのようなタイプの疑いとも何かを信じることは両立するとの主張

だということになる。

なぜある事柄についてこのような疑いを持つこととそれを信じることは両立するのか。このような議論を展開する論者は、ある事柄に関して、それに対する疑いが向けられ、それに対する信が危機にさらされたとしても、それでも信は保つことはできると主張し、【前提 1】の擁護を目指す (McKaughan 2013: 106-107 など)。

次の事例を考えてみよう。

### 【殉教事例】

タロウは全知全能で善良な神が存在すると信じている。この神は善良な神であるため、その信者が危機に陥った時は守るとされている。タロウはこの神への純粋な信仰を保ち生きてきたが、ある時、タロウが信じる神を信奉する宗教が国からの弾圧を受け、国はこの神への信仰を禁じてしまった。国の態度は苛烈であり、神への信仰をやめない人たちを捕まえ、信仰をやめると言うまで拷問にかけた。タロウもつかまり、拷問にかけられることになった。激しい拷問の中、タロウはなぜ純粋な信仰を保つ彼ら信仰者を神が守らないのか、疑問を持ち始めた。ただ、彼はこれまでの経験から神に守られたと感じることもあり、それらの体験は彼にとって神の存在を示す証拠でもある。苦痛の中、彼は証拠を比べても神が本当に存在するのかわからないと結論したが、それでも正しい信仰者はこのような状況においても信仰を貫くべきだと心に決め、絶命するまで拷問に耐え抜いた。

この事例において、タロウは一定の疑いを感じている。即ち、善良な神は信仰者を助けるはずなのに、なぜ彼やその仲間のような信仰者を助けようとししないのか、疑問を感じている。ただ、それでも神の存在を示す証拠も彼としては持っている。つまり、タロウは、証拠だけでは神を信じ続けるのかそれともそれをやめるのか決めることができないような状況にある。このような状況であった場合、われわれは神が存在するとの信念を持つことはできな

いように見える。

それでもタロウは「信仰を貫いた」ように見える。彼が殉教への道を選んだことがその何よりの証拠であろう。ここでのタロウの信仰の選択は、ウィリアム・ジェームズが言うような真正な選択 (genuine option) であったのかもしれない。一定の疑いを持ちながらもタロウがこの場面で信仰を持っていたと考えることができるのであれば、疑いと信仰は両立するものであり、【前提2】が支持されることになる。

類似的な事例を宗教以外の文脈でも考えることができる。

### 【浮気事例】

オセロはデズデモーナのハンカチを同僚の部屋で見つけてしまった。このことは、デズデモーナがオセロに黙って同僚に会っていること強く示す証拠である。しかし、デズデモーナの日頃の生活を見てみると、オセロには彼女が不貞を働いているようには見えない。今のところ、手にしている証拠ではデズデモーナの潔白について、決定的なことは言えない。それでもなお、オセロは夫婦であるならば配偶者を信じるべきだと感じ、デズデモーナの潔白を信じることにした (本当は持てなかったのだが)。

この事例においても、オセロにはデズデモーナの潔白を示す証拠もそれを否定する証拠も与えられているため、証拠だけでは妻を信じることができず、疑いの心が生じている。このような疑いがあった場合、オセロはデズデモーナが潔白であるという信念を持つことはできないように思える。だが彼は、夫婦であるならばパートナーを信じるべきだと考え、妻を信じることにした。つまりこの事例は、衝突する証拠があるために疑いの心が生じたが、それでも配偶者を信じることができた事例であるように見えるということである。

以上が疑いからの論証の内実だが、では、この論証はどれほど説得力を持つものか。疑いをもちつつも何かを信じているように見える人の心は、ここまで議論してきた「信 (faith)」と名づけることができるようなものなのだ

( 56 )

ろうか。そして、それは本当に「信念なき信 (faith without belief)」なのだろうか。

この点について、非信念説の擁護者は、信念なき信なるものがどのような心の状態なのか説明しなければならないが、これに関する非信念説側からのいくつかの提案については以下で検討する「プラグマティックな信からの論証」の箇所で考察する。その前に、非信念説のためのもう一つの論証を見てみる。

## [2] 言語的観点からの論証

非信念説を支える他の論証として、以下の言語的観点からの論証を挙げることができる。

**【前提1】** 英語表現において、belief は否定されるが、faith は否定されない場合がある

**【前提2】**【前提1】の説明は、信の成立のために信念は必要条件ではないということである。

**【結論】** 信念は信を持つために必要なものではない。

まずは**【前提1】**について説明する。英語表現では、ある人に信念を帰属することは否定されるが、それでも信を帰属することは許容されることがある。以下、いくつかの例を見てみよう。

“I don't know what to believe, whether she'll stay with me or not, but I have faith that she'll stay” (Howard-Snyder 2013: 361-362),

“I don't know whether X – I have no idea whether I believe that X or not – but I have faith that X” (Buchak 2012: 226n)

\*太字による強調は筆者による。

これらの英語表現は、文法的には問題がないし、通常の会話としてもそれほど不自然なものではない。つまり一見したところ、われわれの言語の使用は信念と信の区別を想定しているように見えるということである。

では、われわれが上記のように言語的に両者を区別していることは、信を持つために信念は必要ないとの考えによって本当に説明されるだろうか (つまり、【前提2】は適切なのか)。

本稿ではこの問題についてそれほど立ち入った考察は行わないが、この論証に対する一つの疑義について、提示しておく。

この論証はわれわれの実際の “belief” や “faith” という言葉の使用の仕方に訴えるものだが、われわれの実際の言語の使用はそれほど正確なものであると見なすことはできず、両者を区別して使っているとしてもそれが両者の本当の差異を表していると思わせるかどうか疑わしい、という指摘がある (Malcolm & Scott 2017: 265)。たとえば、夕食の計画を立てようとして冷蔵庫を開けた時に、「あー、何もないよ」と言ったとする。このような発言は日本語の表現として自然だが、この発言を字義通りに受け取るわけにはいかない。ここで使用される「何もない」という表現は冷蔵庫の中に何もないということを意味していない。むしろ、「夕食のおかずになりそうな食材があまりない」程度の意味であろう。このように考えると、たとえ belief はないが faith はあるとしている英語表現があるからといって、必ずしも両者に差異があるとまでは言えないかもしれない。

Belief や faith に関する語用論ではなく意味論を提示し、両者の間に違いがあると主張することはできるかもしれない (Sessions 1994, Buchak 2012)。いずれにしても、言葉の厳密な意味ではなく、実際の使用に訴える言語的論証は、上のような問題も抱えていることから、これだけでは両者の違いを示す決定的なものとはならないだろう。

### [3] プラグマティックな信 (pragmatic faith) からの論証

信念と信の差異を示す論証として、最後に「プラグマティックな信 (pragmatic faith) からの論証」と呼ぶことができるものを見てみる。この論証は以下のような形式をとる。

**【前提1】** プラグマティックな信は真正な信である。

**【前提2】** プラグマティックな信は信念を含まない場合がある。

**【結論】** 信念は信を持つために必要なものではない。

この論証の説明にはここで言うところのプラグマティックな信なるものの説明をする必要があるが、以下のような説明を加えることができる。

**【プラグマティックな信】**：ある事柄に対してプラグマティックな信を持つとは、それが真であることを示す証拠に基づいてそれを信じるのではなく、道徳的な考慮や宗教的な考慮といった、真理探究以外の何らかの他の考慮に基づいてそれを信じることである。

例を用いて考えてみよう。タロウが妻に誘われてある宗教を信じるようになったとする。タロウは教義について詳しく調べてその宗教を信じ始めたわけではない。妻との信頼関係を確保するという理由で、この宗教を信じ始めた。タロウはこの宗教の主張が真であることを示す証拠によって信じ始めたわけではなく、妻との信頼関係の確保という実践的な理由で信じ始めているため、彼がここで持った信は上記の説明に従うとプラグマティックな信ということになる。

この論証の擁護者はこのようなプラグマティックな信は信念を必ずしも含まないと主張するわけであるが、この主張を擁護するためにはプラグマティックな信の内実を示すためのさらなる説明が必要だろう。その中の代表



的なものとして、プラグマティックな信を受容 (acceptance) として理解するとの提案がある (Alston 1996)。

この提案によると、あることを受容するとは、その命題の受容に関係する決定を下す際にその事柄が成立していると仮定してその決定を行うとの方針を採用することだとされる。

再び例を用いて考えてみよう。【浮気?】事例において、もしオセロがデズデモーナは潔白であるという命題を受容した場合、この仮定に基づいて様々な決定を下すことになる。たとえば、デズデモーナが潔白であると仮定すると、彼女を責める理由は何もなくなるから、オセロは彼女を嫉妬から殺害するなどという決定は下さない。また、彼女が潔白であると仮定した場合、キャシオも彼女と不義を働いていたことにはならないため、彼に対して恨みを晴らすような行為もオセロはしないだろう。

さて、受容という心の状態をこのように理解したところで、受容が信念を必ずしも含まないことが示されなければ、非信念説の擁護にはならない。ある事柄に対して信念を持つことなく受容することができるのだろうか。

この点を考えるためには、科学哲学においてしばしば議論の対象となる科学理論の受容について考察することが有益だろう。受容という概念はしばしば科学哲学でも持ち出される。それによると、科学者たちは仮説の提唱や実験の提案を行う際に、背景理論を真であると見なしている (= 背景理論に関する信念を持つ) わけではなく、単に受容しているだけであるとされる。科学的理論の受容には、その理論を前提にして研究活動を行う、その理論を使って科学的説明を試みるなどの一種のコミットメントが伴う。科学者たちは背景理論を受容することで、さらなる仮説の提唱や実験の提案を行う。このような仕方では、科学を説明する際に受容という考えは重要な役割を果たす (Van Fraassen 1980)。

受容に訴えて非信念説を主張する論者は、他の信の事例も同様に理解できると主張する。即ち、ある事柄に対して信を持つことは、科学者が科学における背景理論を受容する仕方と基本的には同じ仕方で行われるものである、

と考える。科学者が背景理論を真であると見なさずに受容し、それによって様々なコミットメントを自らに課すように、われわれは他の文脈においても信念を持たずにある命題を受容することができる。そのような受容も真正な信であると見なすことができる。と。

プラグマティックな信の例としてここまで受容という考えについて見てみたが、プラグマティックな信の内実として他にも想定 (assuming)、同意 (assenting)、希望 (hope) なども挙げられている (Golding 1990, Buckareff 2005, Howard-Snyder 2013, Schellenberg 2005, 2014, Pojman 1986)。これらは全て信念なき信の例ということになるが、これらの例が上述した疑いからの論証においてもとめられる信の内実に関する具体的な例ということになる。

さて、このようなプラグマティックな信に訴える非信念説のための論証はどれほど見込みがあるのだろうか。この論証に対する一つの反論として、信念を伴わないプラグマティックな信が信を持つふりをする事 (pretend to have faith) と何が違うのか、十分な説明ができないというものがある。信を持つふりをする事と信を実際に持つことは異なることであろう。もし信念を伴わないプラグマティックな信と信を持つふりに違いがないのであれば、プラグマティックな信は真正な信仰とは言えないということになる。

信をもつふりをするとはどういうことだろうか。次の例を考えてみよう。

**【信仰を持つふり】** (Malcolm & Scott 2017: 268 を参照) : ハナコは宗教的コミュニティに生まれ、家族も熱心に信仰実践をしている。このコミュニティ・家族から離れることはハナコにとってアイデンティティーの喪失にすらつながりかねないことである。このような社会的・家族的なプレッシャーから、ハナコはあたかも神がいるかのように振る舞う。何かの決定を下す場合は、神がいるとの想定で行うし (聖書が禁じていることを重視して生活する、など)、信仰上の議論になった時は「神はいる！」と発言はする。しかし、彼女がこのような振る舞いをするのはあくまで社会的・家族的プレッシャー

が原因である。もし彼女の発言を誰も聞くことができないという状況であった場合、彼女は誰かに「あなたは神が存在すると本当に考えていますか？」と聞かれた場合、「もちろん、神は存在すると私は考えています」とは答えない。ただし、彼女はこのような状況におかれたとしても、「神など存在しない」と答えるわけでもない。つまり、積極的に神の非存在を信じているわけではないが、かといって積極的に信じているわけでもない、ということである。

上の事例においてハナコは真正な信仰を持つとは思えない。それは、彼女が宗教的信仰を持つ理由が、信仰の正当性とは直接的には関係がないことであるように見えるからだろう。では、ハナコの信仰を持つふりと信念を伴わないプラグマティックな信を持つことは、何が違うのだろうか。たしかに、プラグマティックな信を持つ人は、問題になっている事柄について、積極的な不信を抱いているわけではない。しかし、それはハナコも同じことである。ハナコは彼女の宗教的信仰を否定する強い証拠を持っているわけではない。しかしながら、彼女は宗教的信仰を持つ人が行うであろう対応を、社会的・家族的プレッシャーによって行っている。これはプラグマティックな信と異なるものとは思えない。そうすると、やはりプラグマティックな信は真正な信とは言えないのではないかとの疑義が浮上してくる。

ハナコは「神は存在する」という命題を信であると見なしているわけではない。ところが、あたかも神が存在しているかのように振る舞っている。このことは、彼女が持つ心の状態を虚構主義的 (fictionalism) に理解することの一つの理由になる (Deng 2015, Jay 2015)。ある分野に関する談話 (discourse) について虚構主義的に理解するとは、その分野において提示される命題に対して信念を持つわけではないが、それがあたかも信であるかのように振る舞うということである。

われわれが文学作品に対して持つ態度や、子どもに物語を読み聞かせる時の心持ち、子どもが「○○ごっこ」をする際に持つ心の状態はこのような

ものであるとされる (Joyce 2002)。

直観的に考えれば、宗教的信仰を持つ人の態度を虚構主義的に理解することは相当に難しいように思える。ある宗教を信じている人は、その宗教を文学作品などの一種の虚構として信じているわけではないだろう。その宗教が示すことが真理であると考えて、それに対して信仰を持っていると考えるのが自然である。

ただ、宗教を虚構主義的に理解する方針が、必ずしも宗教実践から遠ざかるものではないとの指摘もある (Scott & Malcolm 2018)。これらの問いは他の分野における虚構主義に関する議論も参照しつつ、さらなる探求が待たれる問題であろう。

以上、信が信念的なものであるかという問いに関するいくつかの考察を見てきた。以下、信に関するその他の論争も見てみるが、最小限の記述に留める。それは、以下の問いは信が信念的なものであるか否かという問いと密接に関わるものであるからである。即ち、信が信念的なものであるか否かについて答えることによって、信に関する残された問いについても自ずと答えが出そろうてくるということである。このような意味で、信が信念的なものであるか否かという問いは、信に関する中心的な問題であると考えてよいと思われる。

## 5-2：信は自発的なものか

何かに対して信を持つとは自発的 (voluntary) なものなのだろうか。一見したところそのように見える。人々は様々な経験を経たのちに、ある宗教的信仰を選び、その信仰を受け入れることを決定しているように見える。宗教以外の事例について同様だろう。たとえば上述のオセロの事例を考えてみても、オセロは自ら決定して、妻の不貞を伺わせる証拠を無視して妻を信じることにしているように見える。この一連の心の動きはオセロによって自発的に引き起こされたものであるように思える。

しかし、信念説を取った場合、信にそれほど自発性を認めることができるかどうか、疑わしくなる。それは、多くの論者は信念の自発説（doxastic voluntarism）を拒絶しているからである。

次の例を考えてみよう。「京都が首都であるとの信念を持つことができれば100万円あげますよ」と日本で育った私が言われたとする。100万円を得たいと思っている私は、必死に京都が首都であるという信念を持つとする。心の中に「京都が日本の首都である」という文を思い描いたりする。ただ、どのように努力をしたところで、私は本当には京都が日本の首都であるとは信じられないだろう。

このことが示していることは、信が自発的なものか否かという問題は、信に関して信念説をとるか非信念説をとるかで大きく対応が異なってくるということである。信念説をとるのであれば信念の自発説が擁護が難しいことが理由となり、信の自発性を擁護することは難しくなる。一方で、非信念説をとった場合はこの問題を回避できるため、信の自発性を説明しやすくなる。

この点を考慮に入れる場合、もし信の自発性を主張するとなった場合、以下の二つの戦略が考えられる。

方針①：信念説の是非に関する検討を行う。信念説を受け入れないのであれば、この問題を回避し、信仰は自発的なものであると主張することができる。

方針②：信念の自発説、信仰の自発説の両方で議論されている制御（control）という概念について検討し、間接的な制御についてはどちらも可能であると主張する（Rettler 2018）。

### 5-3：信は一種の行為か、それとも、状態か

上の問題に関連するものとして、信が一種の状態か（state）か、それとも一種の行為か（action）という問いもある。この問いも、信に関する信念説

をとるか、それとも非信念説をとるかで、対応が大きく変わってくる。

もし信念説が正しく、信が信念を必然的に含むものであった場合、信を行為と考えることには困難が伴う。それというのも、上述したように信念は一種の傾向的状態として理解されることが通常であるため、そのような信念を含む信も、信に由来するコミットメントにより何かの行為が生み出される傾向性は持つものの、それ自体は状態であると考えることが自然であるということになるからである。

一方で、もし非信念説が正しく、信が信念を含まないものであった場合、信を一種の行為であると理解することは容易になる。たとえば、信を一種の受容として理解した場合、受動的な信念とは違い何かを受容することは意識的な作用でありある程度の意志作用が働いている一種の心的行為 (mental action) と見なすことができるように思えるため (Cohen 1992)、信を行為と見なすという考えにも見込みが出てくる。

また、信の帰属に関して考察することで、信は状態ではなく行為を伴う活動の一種であると考えられることもできるかもしれない (Falk 2005, Bishop 2002)。ある信を持つとは、それに関係する信念を含めた心の状態を一定期間を保持することの試み (trying) と理解できるかもしれないが、そのような試みは静的な状態ではなく一種の動的な行為・活動として理解することができる (cf. Peacocke 2007)。一方で、もし信の帰属はある瞬間の心の状態によって決まるという内在主義的な信の帰属説を取った場合、信はある特徴を持つ心の状態であると理解するという戦略をとることが自然だろう。

#### 5-4 : 信仰の目的・機能は何か

信の目的や機能に関する問いもしばしば議論の対象となる。もし信が信念であった場合、信の目的は信念が何を目的とするかという問いと密接に関わってくる可能性が出てくる。信念の目的はしばしば真理であると言われる

が（Williams 1973: 137）、そうであった場合、信念を必然的な要素として持つ信仰も、信念を含むが故に、真理がその目的であるということになるかもしれない。

一方で、もし非信念説が正しく、信が一種の行為であった場合、信の目的は単に真理ではないということになり、その目的は他の目的と同様に決まるものと理解されるだろう。約束を守るという行為は、常識的には単に自分の利益を増幅させるためのものではなく、一種の倫理的目的を果たすための行為だと理解される。一方で、たとえば私が定期的に運動をすることは、倫理的な目的を果たすためというよりも、私の福利を向上させるためという個人的な利益の獲得が目的ということにあるだろう。同様に、様々な場面で持たれる信もその目的や機能は文脈において決定されるものかもしれない。たとえば、宗教的信仰はある宗教的要求に応えることがその目的であり、必ずしも真理を得ることが目的ではないということになるかもしれない。

信仰の目的・機能という観点を考察することは、ある信が良い信なのか、悪い信なのか、評価することにつながる。この点は重要である。それというのも、しばしば宗教的信仰は非合理的なもの（irrational）なものとして批判の対象となることがあるが（Harris 2008: 110）、この批判の成否は信仰の目的・機能と密接な関係があるからである。もし信が一種の信念であり、他の信念と同じように証拠に基づいた認識論的な批判の対象となるものならば、信念の一種である宗教的信仰が非合理的であるという主張は、正当な批判になり得るだろう。ところが、そもそも信が信念ではなく、その目的や機能は信念とは異なるものであった場合、信を非合理的なものであるとして批判することは、見当違いの批判ということになる可能性が出てくる。それというのも、もし信が信念とは全く異なる感情の表出などであった場合、そもそもそのような感情の合理性・非合理性は問うことができない、と応答することが可能になるからである。

信には信念や行為とは異なる独自の機能・目的があるとする見解もある。たとえば、信が持つ機能は、ある事柄を否定する証拠が提出されたとしても

それに対して揺るがない心持ちを保ち、信に基づいてなされる様々な活動、決定、行為を安定的に継続させるためのもの (Howard-Snyder 2016: 154)、という提案もある。これは文脈依存的なものではない信という心の現象が共通して持つ特徴の提案ということになる。

## 6. 現状のまとめ

以上、近年の信 (faith) に関する研究動向について、概観した。信仰について同意ができていて、論争があることについて考慮した場合、信仰研究の現状はどのように理解されるべきか。

一つ目に確認できる点は、信という心の現象は宗教の文脈だけでのみ問題になるようなものではなく、宗教に関係しない場面でもしばしば問題になる心の現象であるという点である。この点は、今後の信についての検討が、必ずしも宗教哲学内部における探究に留まらないものになることを示唆する。

二つ目に確認できる点は、信という心の状態は、ある対象に対する肯定的な態度や関係するコミットメントの受容など、複合的な要素によって成立しているものであるという点である。信念説を主張する論者であっても、単に何かに対して信念を持つことと、それに対して信を持つことの差異は認めるだろう。

三点目に確認できることは、信が信念的なものであるか否かという問いは信の説明を巡る論争において中心的な問題であるという点である。上述したように、信が信念的なものであるか否かという問いは、信が持つとされる他の特徴についても含意を持つ重要な問いである。

これらの点を踏まえて、今後の信に関する研究において課題となる問題は何か、以下、二つ挙げ、本稿を閉じたい。

### ①信と虚構の関係についての詳細な検討

上述したように、信が信念的なものであるか否かを問う際に、信念を伴わ



ない信なるものが真正な信として認められるか否かが重要な問いとなる。この点について、メタ倫理学においては道徳を虚構と見なす説が近年一定の発展を見せているが（安藤 forthcoming を参照）、このようなメタ倫理学における知見を活用して信と虚構の関係について考察を進めることができるかもしれない。虚構主義は形態によってはわれわれが通常下している道徳判断の仕方について改訂を迫るものではあるが、それでも、道徳的判断はわれわれが生きていく上で重要な役割を果たすものだと主張することで、道徳の重要性を確保しようとする立場でもある（Joyce 2002）。メタ倫理学におけるこのような研究動向も参考にしつつ、たとえば信を虚構と見なすことは本当に真正な信の喪失になるのか、丁寧な検討が可能となるかもしれない。

## ②異なる種類の信それぞれに関する詳細な検討

上述したように、信は宗教だけに関することではなく、宗教に関係しない文脈においても語られる現象である。このことを考慮に入れると、【宗教】【励まし】【スポーツ】【浮気?】【採用】のそれぞれの事例における信に求められるものは、それぞれ性格が異なるものであるようにも感じられる。たとえば、【スポーツ】においては本稿で問題になったような疑いがあったとしてもある人に信を帰属することは許容されるかもしれないが、【宗教】においては宗疑いは許容されないということになるかもしれない。このことを考えると、たとえば宗教的信仰について信念説をとり、非宗教的信については非信念説をとるということも理論的には可能なかもしれない。

このように考えてくると、異なる文脈で語られる信は、本質的には別種のものか、それとも何らかの特徴を共有する同種のものか、という問いが浮上してくる。それぞれの場面で語られる信について考察を深めることで、その他の信との関係も明確になり、最終的に信という心の状態に関する包括的な理解が深まっていくことが期待される。

## 謝辞

筆者が最初に宗教哲学に興味を持ったのは創価大学における宮田幸一先生の関連する授業に参加したことがきっかけであった。本稿ももとをたただせば宮田先生から受けた学問的刺激がその淵源の一つである。この場を借りて感謝申し上げる。

また、本稿の内容の一部を東洋哲学研究所内での研究会にて発表し、参加者より貴重なコメントを頂いた。研究会への参加者に対して、この場を借りて感謝申し上げる。

本稿の内容の一部は創価大学での Introduction to Philosophy の授業において使用し、授業でのディスカッションの中で参加者から貴重なコメントを頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。

### 使用文献：

- Adams, R. M. 1987. *The Virtue of Faith*, Oxford: Oxford University Press.
- Adams, R. M. 1999. *Finite and Infinite Goods*, Oxford: Oxford University Press.
- Alston, W. 1996. "Belief, Acceptance and Religious Faith", in Jordan, J. & Howard-Snyder, H. (eds.), *Faith, Freedom and Rationality*, Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 3-27.
- Audi, R. 1972. "The concept of believing", *Personalist*, 53, 43-62.
- Audi, R. 2008. "Belief, Faith and Acceptance", *International Journal for Philosophy of Religion*, vol. 63, 87-102.
- Bishop, J. 2002. "Faith as doxastic venture", *Religious Studies*, 38 (4), 471-487.
- Buchak, L. 2012. "Can it be rational to have faith?", in Chandler, J. & Goins, L. (eds.), *Probability in the Philosophy of Religion*, Oxford: Oxford University Press, 225-246.
- Buchak, L. 2014. "Rational faith and justified belief", in O'Connor, T. & Aquino, F. D. (eds.), *Religious Faith and Intellectual Virtue*, Oxford: Oxford University Press, 49-73.
- Buckareff, A. 2005. "Can Faith be a Doxastic Venture?", *Religious Studies*, 41.4, 435-445.
- Cohen, J. 1992. *An Essay on Belief and Acceptance*, Oxford: Oxford University Press.
- Deng, N. 2015. "Religion for Naturalists", *International Journal for Philosophy of Religion*,

- 78, 195-214.
- Evans, C. S. 1998. *Faith Beyond Reason: A Kierkegaardian Account*, Cambridge: Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
- Falk, A. 2005. "A Pascal-type justification of faith in a scientific age", *Philosophy*, 80 (4), 543-563.
- Golding, J. 1990. "Toward a Pragmatic Conception of Religious Faith", *Faith and Philosophy*, 7, 486-503.
- Harris, S. 2008. *Letter to a Christian Nation*, New York: Vintage.
- Howard-Snyder, D. 2013. "Propositional faith: What it is and what it is not", *American Philosophical Quarterly*, 50 (4), 357-372.
- Howard-Snyder, D. 2016. "Does faith entail belief?", *Faith and Philosophy*, 33 (2), 142-162.
- Ichikawa, J. 2018. "Faith and Epistemology", *Episteme*, <https://www.cambridge.org/core/journals/episteme/article/faith-and-epistemology/B1B65CA54F07B3767BCC3D9029D1D946>
- Jay, C. 2015. "Testimony, Belief and Non-Doxastic Faith: The Humean Argument against Religious Fictionalism", *Religious Studies*, 52 (2), 247-261.
- Joyce, R. 2002. *The Myth of Morality*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Kvanvig, J. L. 2013. "Affective Theism and People of Faith", *Midwest Studies in Philosophy*, XXXVII, 109-128.
- Malcolm, F. & Scott, M. 2017. "Faith, Belief and Fictionalism", *Pacific Philosophical Quarterly*, 98, 257-274.
- Malcolm, F. & Scott, M. 2018. "Religious fictionalism", *Philosophy Compass*, <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/phc3.12474>.
- MacDonald, S. 1993. "Christian Faith", in Stump, E. (ed.), *Reasoned Faith: Essays in Honour of Norman Kretzmann*, Brattleboro: Echo Point Books, 42-69.
- McKaughan, D. J. 2013. "Authentic Faith and Acknowledge Risk: Dissolving the Problem of Faith and Reason", *Religious Studies* 49, 101-124.
- Peacocke, C. 2007. "Mental action and self-awareness", in McLaughlin, B. & Cohen, J. (eds.), *Contemporary Debates in Philosophy of Mind*, Oxford: Blackwell Publishing, 358-376.
- Plantinga, A. 2000. *Warrented Christian Belief*, Oxford: Oxford University Press.
- Pojman, L. 1986. "Faith Without Belief?", *Faith and Philosophy*, 3, 2, 157-176.
- Ryle, G. 1949. *The Concept of Mind*, Chicago: The University of Chicago Press. [坂本百大・井上治子・服部裕幸・信原幸弘【訳】『心の概念』みすず書房, 1987年]
- Schellenberg, J. 2005. "On Religious Faith", in *Prolegomena to a Philosophy of Religion*, Ithaca: Cornell University Press, 106-166.

- Schellenberg, J. 2014. "How to Make Faith a Virtue", in O'Connor, T. & Aquino, F. D. (eds.), *Religious Faith and Intellectual Virtue*, Oxford: Oxford University Press, 74-93.
- Schwitzgebel, Eric. 2013. "A dispositional approach to attitudes: Thinking outside the belief box", in Nottelmann, N. (ed.), *New essays on belief*, New York: Palgrave Macmillan, 75-99.
- Sessions, W. L. 1994. *The Concept of Faith: A Philosophical Investigation*, Ithaca: Cornell University Press.
- Stanley, J. & Williamson, T. 2001. "Knowing How", *The Journal of Philosophy*, 98 (8), 411-444.
- Swinburne, R. 2005. *Faith and Reason*, 2nd edn. Oxford: Oxford University Press.
- Van Fraassen, B. 1980. *The Scientific Image*. Oxford: Oxford University Press.
- Williams, B. 1973. *Problems of the Self*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 安藤馨 2019 (予定) 「道徳的非実在論」, 蝶名林亮【編】『メタ倫理学の最前線』(仮), 勁草書房.
- 池吉琢磨・中山康雄 2009 「knowing-that と knowing-how の区別」『科学基礎論研究』37 卷.